

# 解

LIFE MAGAZINE "KAI"

平成19年5月1日発行 年4回1・4・7・10 No.5  
季刊誌 2007年春号  
2007 Spring Issue

日々にみる、  
日常にいきる、  
飛騨に住む、  
そして飛騨に宿る。



感情と時空と旋律が  
体を動かしていくというのが  
舞の心だと思います。

舞踊家  
谷口裕和  
Taniguchi Hirokazu



今から約四六〇〇年前、中央アメリカ（メキシコ）の密林に誕生し、高度な文明を築き上げたマヤ帝国。彼らの文明は四万種にも及ぶ文字種や天体観測から得た暦、さらには零という概念を作った数学や二十進法、そして建築技術などが挙げられるが、マヤの特長でもある巨大階段式基壇の神殿はエジプト文明を上回る。

そんなマヤ文明の建築様式をモチーフにしたミュージアムが八年前、高山の中山丘陵地に完成したのは記憶に新しいが、その中でも床が上下に可動するピラミッドホールはユニークだ。

およそ二〇〇〇ほどの客席が作れる大きなホールには水圧で押し上げられ、ゆっくりと回転する石の球（重量五〇〇キログラム）や石で作られた階段式ピラミッド型の大きな吹き抜けがあり、天空から差し込む光を眺めていると、ピラミッドの深部に入り込んでしまい、出口を探す迷い人のような気分になる。

このホールには回転する球のほかに能楽師、狂言師が演じる能舞台があるが、天空の光りが届かないその場所には神聖で濃密な空気が漂っていて、無機質なピラミッド的空間との境界を作り出している。ところで光記念館が開館し七年が経つが、過去にこの舞台で能が演じられたことはあっても日本舞踊を舞つた舞踊家はその一人を除き誰もいない。その一人とは、舞台芸術家として活躍している舞踊家「谷口裕和」であるが、ピラミッド空間の中の能舞台で舞う姿は、どこか神靈と交感する巫女舞のように私には見えた。

踊っている中に自分がある。

日本舞踊は御存じのように様々な流派があり、お弟

子さんはその流派のお師匠さんに習いながら踊りを学んでいきます。稽古に稽古を重ね、そして舞台という晴れの空間で表現することによって芸は少しづつ磨かれ、出来ないことが次第に出来るようになります。

こうした発表の場を私たちは「おさらい会」と呼び、家元をはじめお師匠さんやお弟子さんたちがたくさん出ますが、「おさらい会」では普段は見る機会が少ない家元の踊りや、他のお師匠さんの踊りが見られますから大いに勉強になります。

私は日本舞踊では五大流派の一つに数えられる西川流に入門し、幼い頃から数えきれないほどの「おさらい会」に出させていただきました。たとえば変ですが、安定した大企業の中で舞踊を学ぶのも一つの道なのですが、個性ある独創的な中小企業で自分の可能性を試してみるという道もある訳です。

私は中学を卒業すると同時に七歳に入門した西川流の宗家の元へ内弟子として入り、上京。たかまきその後、

十九歳になると同時に素踊りで有名な梅津貴祀に師事しました。梅津貴祀は舞踊家だけでなく振付師としても有名な方で坂東玉三郎をはじめ中村勘三郎などの振付けを手がけていらっしゃいました。私も幾度か坂東玉三郎の振付けの助手をさせていただいたのですが、歌舞伎舞踊の伝承や新たな創造に携わることによって随分と自分の芸の肥しになりました。

## 舞うということ。

「谷口裕和の会」を振返つてみると「自分一人の力ではなく、関わっていただいた全ての人のお蔭」という思いがとても強いですね。長唄演奏家やお囃子の方をはじめ、能舞台をお貸していただいた光記念館。さらに衣裳、床山などの裏方。そして前例のない日本舞踊のチケット販売など、谷口裕和のために全ての方が動いて下さり、「私の背中を多くの方々が押してくれたんだな」と痛感しています。これは「おさらい会」では知ることができなかつたものです。

実は東京でも何度か能楽堂で舞つたことはあります。生れ育った場所で舞うというのは妙な緊張感がありました。生まれ育った場所で舞うというのには、お弟

まね的な振りや、関係のない情景描写やリズムに合わせた振りを組み合わせていきます。

私が書く図はいわば振付の設計図のようなもので、後日、この設計図を元に私が踊ります。それを見て家元が幾度も手直しをし、ようやく完成すると私の踊りを見ながら、歌舞伎役者の方や俳優さんが稽古をします。このようにして私は家元から歌舞伎踊りのイロハを教えていただきました。その頃私は、梅津貴之助という名で活動していましたが、五年前に家元の梅津貴祀から巣立ち、舞踊家・振付師として独立しましたので、現在は梅津ではなく本名の谷口姓を名乗っています。

舞に興味を抱いた幼少期に始まった道ですが、二十代最後を迎えるにあたって「踊りに対する谷口裕和の想い」のようなものを高山の人たちに一度しつかりとした形でお伝えしたかった。それが「谷口裕和の会」でした。



出す瞬間は緊張もピークに達していました。

能ではこの鏡の間で面をなおしたり、精神を集中したりするのですが、この日のために茶道の師が書いて下さった「一步」という書の軸を掛け、それを眺めることで精神を集中しました。鏡の間から踏み出す一歩。舞踊家としての一歩。あらたな一步。人生の一歩。まさに書かれてある「一步」には色々な意味があつて、この書のお蔭で本番では不思議と気持ちが落ち着きました。

演目は『二人枕久』と『京鹿子娘道成寺』の二つを上演しましたが、『京鹿子娘道成寺』は一人で五十分も舞い続けます。

『役者の踊り』は豪華な衣裳が醸し出す雰囲気や、俳優自身がその役になりきることで生まれる迫力や情念などが見どころになりますが、かたや『素踊り』はそうした要素が排除され、黒もしくは色紋付に袴といういでたちで、化粧も小道具も極力少ないので。当然、踊りそのものの技術を見ていただくことになりますから、歌舞伎役者が演じる『京鹿子娘道成寺』とは違う次元の踊りにしなければなりません。

ある意味で『素踊り』は無駄のない動き、流れの中の自然な動き、そして間合いなど、どちらかとい

えばスポーツ的とも言えます。踊りは見た目以上に体力を使いますから、マラソンランナーがゴールした途端、力尽きて倒れるという感じと同じで、踊り終ると全身から力が抜けてしまっています。

『京鹿子娘道成寺』の終盤では蛇になつた主人公が橋掛りで力尽きて倒れるというシーンがありますが、膝を崩しながら倒れるのではなく、いきなり前にバタンと倒れます。腕立て伏せをするような感じで体を支えながらという感じですが、それでも

タイミングを間違えれば危険です。ところがリハーサルでは力を全て使い切ってしまい、倒れる際に両腕がすっと出てこなくて、もろに顔から床に倒れてしまいました。幸い大きな怪我にはいたりませんでしたが、本番では脛上がつた上唇部分にドーランを厚く塗りなんとか誤魔化しました。

素踊りは優雅な半面、見えないところで筋肉を使いますから年齢を重ねるにつれ、できる演目とできない演目がはつきりしてきます。若さと体力で踊りきる演目もありますが、一方では深みといいます

か、研ぎ澄まされた表現は、逆に年を重ねないと滲み出できません。

芝居と違つて踊りとはすごく抽象的なものですから、観る方をいかに想念の世界に誘うことができるかが大切で、感情と時空と旋律が体を動かしていくというのが舞の心だと思います。

### しつらえと舞い

祖父が高山で二百年も続く料亭をやつてることもあって、思えば幼い頃から『しつらえ』や『粹』という日本の美を凝縮した世界に囲まれて暮らしていました。

町家づくりのどっしりとした梁や、吹き抜けの天

窓から差す柔らかな明り。薄暗い廊下から眺める濡れた坪庭や枯れ山水の庭。そして季節ごとに変わるお軸やお花。さらに料理をお出しする女性の着物姿や立ち居振る舞いなどが、肌を通して身体の芯にまで染まっているような感じです。

今は芸妓さんの舞を眺めながら、お酒やお料理をお召しになる方は少なくなりました。昔は三味線に合わせながら芸妓さんと踊るような粋な旦那さまがみました。

子どもながらに華やかな舞や唄の饗宴を見て育つた私がこのような舞踊の世界に足を踏み入れるのはしごく当たり前のことで、家族も反対はしなかつたというか、できなかつたのかも知れません。

現在は東京と高山を行き来し、それぞれのお弟子さんを指導しながらスケジュールの合間に、料亭のコーディネートをさせてもらっています。料理に合わせ器を選ぶことや座敷のしつらえなどは舞踊と似通つています。私の舞踊のアイディアは座敷空間から舞台空間へと結びつくことによつて生れるものが多いですね。舞踊は芝居と違つて一人で舞台に立ちますから、工夫することが多くなり、思ったこと、感じたことを踊りに生かしたいと思つてはいるのですが、実際は表現力が思いにまだ付いていません。

先日、私のあとをひたすら付いてくるご婦人がいまして、足早に立ち去ろうとしたのですが、私の名前を呼ぶものですから、立ち止まり話を伺いました。聞くと『谷口裕和の會』を見に来て頂いた方で、踊りを見て「思わず涙が……」と感想を口にされたのです。

『京鹿子娘道成寺』では清姫の化身である花子を演じるのですが（終盤に花子は大蛇に変身）「安珍との悲恋に身を焦がし、怨恨や憎悪を秘めた

女の情念を舞をとおして感じてもらえたなら」と常常々  
思つて一生懸命にお稽古をしてきましたから、ご婦  
人のこうした感想は私にとって最高の讃辞でした。  
一人で舞台に立ちますと批判、賞賛、様々な声にさ  
らされますが、だからこそ進歩があると思います。  
あらゆる意味での「華」がなければお客様は見  
に来てくれませんし、感動も与えることができませ  
んから、咲かせる努力は一生続きます。

聞き取りをもとに構成しています



演目／二人椀久



演目／二人椀久



歌舞伎などの伝統舞踊で活躍するプロの演奏家

